

資料館だより

企画・編集 国立ハンセン病資料館

発行 財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13

電話 042-396-2909

FAX 042-396-2981

URL <http://www.hansen-dis.jp>

企画展・全生病院を歩く ガラス乾板に残る歴史

9月25日(土)から企画展示室で、秋季企画展『全生病院』を歩く―写された20世紀前半の療養所―を開催している。1909(明治42)年の開院当初から1940年代半ばまでの園内の様子を写した写真70点の写真展である。

当館では、開院以来戦後まもなくまでの多磨全生園のガラス乾板約1万2千点を収蔵している。ガラス乾板とは、フィルムカメラが登場する前のカメラのフィルムに相当し、撮影した像をガラス板に焼き付けたものである。割れやすく、印画面も傷がついたり変色しやすい。100年近くの間、必ずしも良好な環境で保管されてきた訳ではないことを考えると、今日その画像を見ることが出来るのは奇跡的である。現在整理作業の途中だが、場所と年代が概ねわかったものを出品した。

今回の企画は、昨年多磨全生園を含む公立療養所が創立100周年だったことを受けて、園内に残る資料や史跡の意味を、改めて見直すとする試みから始まった。昨年開催した企画展「隔離の百年―公立療養所の誕生―」は、療養所が設立されるまでの過程を明らかにしようとするものだったが、

その準備の中で、設立以前の様子を示す実物資料はほとんど残っていないことがわかった。これはつまり、当館をはじめ各園が収蔵している実物資料のほとんどが、療養所設立以後の園内のもので占められていることを意味していた。

療養所の外にあったであろう実物資料の多くは、すでに失われてしまっている。しかし翻って考えてみれば、同じ時間を経ているにもかかわらず、園内に資料と史跡が残っていることは、様々な学びを引き出すことができるという点で、非常に幸運である。この幸運を失うことなく後世にまで伝えていくために、まず今年度は大量に残っていたガラス乾板を手がかりに、現存する多磨全生園の土地について考えてみることにした。

展示全体は3部構成になっている。タイトルを『全生病院』を歩く―とした通り、展示は来館者があたかも当時の全生園の中を歩き回り、建物や景色などのポイントを見ていくようなイメージでつくった。時代は大きく明治末期から大正前期までの草創期と、敷地拡張が始まる大正後期から終戦頃までの時期の2つに分けた。そしてそれぞれ第1部を開院当時の区域、第3部をその後拡張された区



域とし、該当する方に写真を割り振ることで時期の違いを反映させることとした。

拡張前と拡張後の間には、第2部として築山のコーナーを置いた。築山は敷地の拡張が始まった頃、園の外を見たいという患者の願いに基づいて、患者作業による開墾で出た木の根や残土を積み上げて造られたという歴史を持っている。時代的にも地理的にも両方を区分し、かつ取り結ぶ存在として、第1部と第3部との間にあるのがふさわしい。この築山から見た風景の巨大パノラマ写真は、今回の企画展の目玉になっている。

各写真には、現在の敷地内のことなどをどの方向から写したのかという情報を付加した。今はすでに別の建物が建っていたり、現存はするものの移動しているなど、必ずしも写真に写っている場所がそのまま残っている訳ではない。それでも、かつてこの場所にこのような建造物があった、患者の日常生活に深く関わり、苦しみや生き甲斐に対して意味を持っていたのだと思いを巡らすことはできる。土地の記憶とは、そういうものではないだろうか。今回の企画展の目的は、多磨全生園の土地の記憶に目を向け、推し量ってみることにある。そこに学ぶ余地があるのなら、その記憶は貴重なものに違いない。企画展を観た来館者が写真に飽き足らなくなり、実際に園内を歩いてみようという気になってもらえることを期待している。

ハンセン病関連資料調査に ノルウェーの博物館等を訪問

九月六日（十二日）に、黒尾和久学芸課長と田村朋久長島愛生園歴史館学芸員が、北欧ノルウェー王国ベルゲン市に出張し、ハンセン病関連史跡・博物館、資料保存機関を訪問、現地研究者・関係者との交流を行った。

今回の調査旅行は、今年一月に資料館で行った国際シンポジウム『ハンセン病医療政策と資料保存、日本とノルウェー』が縁となり、ノルウェーでの調査を精力的に進めている井上英夫・鈴木静両氏に合流するカタチで実現した。現地では、シンポ登壇者のユングベ・ネルレボ氏、アーネ・スキヴェンス氏、シグード・サンドモ氏そして通訳のオーゲ・バレストッド氏に案内・通訳のお世話になった。

七日午前。シグード氏の案内で同国最古のハンセン病専門病院（聖ヨルゲン病院：写真1）の建物を利用したハンセン病博物館を見学した。市街中心に専門病院があった立地に驚かされたが、同国では常識のようだ。同館は患者の療養生活の痕跡を消さない工夫を



写真1 ハンセン病博物館

し、展示室にあてた病室ごとの小テーマに沿ってノルウェーのハンセン病史が理解できる構成になっていた。注目したのは、患者実名が集めた一枚のボードである。患者実名を展示したというシグード氏のシンポ発表が印象深く、実見を待望していた。患者実名を網羅した研究成果も驚きだが、その展示が可能な社会であることに日本との隔たりを改めて感じた。

午後。シグード氏の進行で、世界遺産ブリッゲン (Bryggen) 博物館ホールにて黒尾と田村が日本の資料館・歴史館での事業実践を紹介、ベルゲン市の博物館関係者との意見交換を行った。先のシンポと同じく、ハンセン病が歴史になったノルウェーと、今なお現実問題の日本との差異を相互に確認する議論となった。「貴方の国はなぜそうか」と問い合うのは確かにどこかしら。「日本はなぜ？」に解答できる歴史研究の深化が私たちに求められている。

八日午前。井上・鈴木氏に同



写真2 マルタさんの墓前で

行、同国最大のハンセン病専門病院（旧第一病院）に「レプロジョー・アーカイブスオブベルゲン」メンバーのローレンス・イルゲン教授を訪ねた。病棟の屋根裏に「死蔵」していたハンセン博士関連資料を教授が「発掘」した話などは非常に興味深い。その前提には如何なる文書も廃棄しない、日本と異なる文化があるように思った。

午後。シグード、ユングベ両氏の案内で、ベルゲン市北東三十キロ程の郊外のミーシャ (Misle) 村を訪ねた。九十歳のアンナさんが、ノルウェー最後のハンセン病回復者の妹マルタさんの墓前で、姪リリアンさんと迎えてくれた（写真2）。かつて同村はハンセン病の多発地帯にあり、アンナさん家族は、祖父・母・兄妹三人がこの病気になった。私たちは、彼女に「この病気への差別はなかったか」と尋ねたが、「母や妹が病気になって苦労はしたが、病気を理由の差別はなかった。むしろ回復した家族との時間が懐かしい」と

静かに答える。病気により家族の絆は切れなかった。また社会もそれを必要としたこともなかった。

続いて古民家を移築した手作り博物館 (Misle Museum) に移動した。展示室にはミーシャ姓をもつ村人の生活史資料が集められ、生業や移民のコーナーでの家族写真の多用が印象的であった。激動の近代を村人がどう生き抜いたか、そこにアンナさん家族の写真もある。リリアンさんは「とくにハンセン病の展示はない。病気の展示は村人に賛成はされない。でもそれは他の病気でも同じこと」と語った。私たちは、もつとアンナさんから、マルタさん達のお話を聞きたいと思ったが、傍らのリリアンさんは、村と家族の歴史を熱く語り続けた。私たちには思惑違いであったが、そうであるのも彼女にとってハンセン病は、普通の病気の一つに過ぎないからだろう。このギャップがじつは重い。

九日午前。在ベルゲン国立アーカイブスを訪問、ユングベ氏のレクチャーをうけた。氏は「世界の記憶」登録のハンセン病関連資料を示しつつ、資料から読み解く禁欲的な姿勢、良質な実証主義とは何かという、氏の歴史研究の方法や視座について熱心に語った。

また氏は、一九世紀末〜二〇世紀初頭にかけて日本・台湾からの書簡も残っていると言う。その時期、日本は世界の趨勢に反して絶対隔離へと舵を切るが、「なぜそうなった？」と問いをたてた時



写真3 ハンセン博士メモリアルルーム

のブラックボックスが本当に多い。支配側の文書が公開されていないからだろうが、日本での調査が叶わなければ、海外資料の検討も必要になるだろう。それには井上・鈴木氏の様に、愚直に研究交流を進め、道を切り拓くしかない。

午後。再び旧第一病院を訪問、シグード氏の案内で、ハンセン博士のメモリアルルームを見学した。博士愛用の品々、標本や蔵書、書簡など一見雑然なような配置だが、本物の迫力はいかにしろれない（写真3）。シグード氏は、そこでハンセン博士の業績の光と影についての話をした。医の倫理への言及だったわけだが、氏の話には、時代・地域をこえて、患者の人権への配慮が常にある。同じハンセン病を冠する博物館人として、その姿勢に共感するところが多い。

十日午前。アーネ氏の案内で、市立アーカイブズの見学をした。常時七十人の人が働く、氏自慢のモダンな施設は、ベルゲン市の人

ハンセン病文学全集 全巻完結

患者・回復者の文学の集大成

今年6月、二〇〇二年から刊行が開始された『ハンセン病文学全集』全10巻がようやく完結した。編集委員は大岡信、大谷藤郎、加賀乙彦、鶴見俊輔の4人。企画・編集・発行は皓星社。全国の療養所入所者・退所者の膨大な作品群から、長い時間を費やして編まれた、いわゆる「ハンセン病文学」の集大成である。

本全集の構成は、第1・2・3巻が小説、第4巻が記録・随筆、第5巻が評論、第6・7巻が詩、第8巻が短歌、第9巻が俳句、川柳、そして第10巻が児童作品である。それぞれの表紙には樹木や風景などのスケッチが配されている。

ハンセン病患者・回復者の自己実現が文学によってなされるという「かたち」は、その内容、数量共に世界に類を見ない。「意志の大きい絶望の大きさに正比する」（北条民雄）とすれば、日本のハンセン病療養所にこれだけの文学作品が生み出されたということ自体が、すなわち患者・回復者の絶望の深さを私たちに突き付けているとも言えるだろう。

同時に、ここに盛り込まれた作品群が表すのは苦悩だけではないことも注目される。時に存在すら否定されるほどの、最も苛酷とされる病を負いながら、なおかつ人

間として生きることの喜び、人間らしく生きることへの欲求を謳ってやまないものが多く見られることは、人が人として生きた姿を克明に伝えている。

もうひとつ、周知のとおりハンセン病療養所では本名でなく偽名を使う入所者が多い。加えて自治会機関誌や文学雑誌に掲載された文章は多くペンネームで書かれている。本全集の各巻末には執筆者



紹介が掲載されているが、誰が何を、いつ書いたのかを同定する作業は困難を極めたと聞く。そこには、患者・回復者にとって「書きあらわす」ということの一つの側面を見せているようにも思う。

内容は小説、詩や短歌などの短文芸、記録・随筆、そして児童作品など多彩である。是非手にとつて、一つひとつの作品から、多くを学びたい。

資料調査日程

前号にも記した通り、当館では今年度から再来年度までの3カ年の計画で、全国の国立療養所13園に残っている資料調査を計画している。今年度分の調査が、9月27日（月）からの松丘保養園を皮切りに始まった。今回の調査は所在確認が主な目的であるため、資料が存在していることを、入所者や職員のみなさんから教えていただかなければならない。そのため調査対象とする資料の具体的なイメージをお伝えしておく必要がある、事前の巡回展と約1ヵ月後の本調査との組み合わせで、全園を回らせていただくことになる。

現在までの実施状況と予定は以下の通り。

平成22年度

・松丘保養園（巡回展9月27日～10月1日 本調査10月25日）
・星塚敬愛園（巡回展10月5日～8

日 本調査11月9日）・駿河療養所（巡回展1月18日～21日 本調査2月14日）

平成23年度（調整中）

・邑久光明園（巡回展5月24日～27日 本調査6月20日）
・長島愛生園（巡回展5月30日～6月2日 本調査7月4日）
・宮古南静園（巡回展10月18日～21日 本調査11月14日）
・沖縄愛楽園（巡回展10月24日～27日 本調査11月28日）
・奄美和光園（巡回展1月17日～20日 本調査2月13日）

平成24年度（日程は未定）

・栗生楽泉園・多磨全生園・大島青松園・菊池恵楓園

各園のみなさまには御協力をお願いいたします。

韓国で11月に

世界ハンセン病フォーラム

11月24日（水）より26日（金）まで韓国ソウルCOEX大会議場において「世界ハンセン病フォーラム」が開催されます。ハンビ福祉協会と政府の保健福祉部が共催するもので、一千人規模の参加が予定されているとのことです。

韓国内からは90人、90カ所の定着村代表、回復者、各国のIDEA、その他関係者などで、テーマは「回復者の人権と福祉について」です。資料館にも招待状がきており、関係者の出席を検討しております。なお、27日（土）は「小鹿島ツアー」も計画されているとのことです。

（2めんよりつづく）

口が約二十五万人だと考えるならば、日本のあり方に照らすとやはり「破格」である。とくにシールド工法で山の斜面をくり抜き、縦横に巡らせた迷路のような巨大な収蔵庫には驚かされた（写真4）。

午後、文書資料のデジタル化作業について見学をし、その後、アーネ氏にユングベ、シグード両氏もまじえた意見交換の場に同席した。この席で、一月開催のシンポジウムの記録集を『資料館ブックレット3』として今年度中に刊行予定であることを報告、同氏らの了承を得た。今回の調査旅行の成果も挿入しつつ、鋭意編集作業にとりかかる心算である。

実質四日間の現地踏査であったが、諸氏のご厚情のもと、公私ともに有意義で濃密な時間を過ごせた。末筆ながら記して謝意を表したい。今回の幸運な経験を黒尾・田村ともに資料館・歴史館活動の糧にできるよう一層努力をしたい。



写真4 市立アーカイブスの収蔵庫

座談会

ハンセン病回復者と話しませんか？
～共に生きる隣人として語り合う～

2008年3月から始まった座談会「ハンセン病回復者と話しませんか？」は、回復者の方々のあたたかい支えにより、これまで続けられてきました。

東村山の5つの公民館（全生園に近い秋津・中央では3回づつ）とふるさと歴史館、清瀬2ヶ所と小平でも開催し、この4月からは資料館の研修室をお借りして月1回開かれています。

参加してくださった園内外の回復者、公民館26人（延べ61人）、資料館16人（延べ33人）の方々の中には、初めて人前で経験や歴史を語られた方も多く、本や講演会、大きな会合では知る事のできない生活や人生の本音の話を伺う事のできる貴重な場となりました。

また、公民館の会場では「全生園と私たちの街」をテーマに展示もし、創立時の近隣住民の反対騒擾事件、農産物品評会と歌舞伎、園内自警団による近隣救援活動、緑化、障害者運動との連携など、隔離の時代にもあった地元と園の関係をたどることで、ハンセン病問題を「他人事」ではなく私たちの街の大切な一部として考える事を訴えました。

映画上映会 風の舞
未来への虹・あつい壁

8月22日、29日の2日間にわたり、ハンセン病関係の映画、ビデオ上映会を行った。子供向けとして、当館の語り部でもある平沢保治さんをモデルとしたアニメ「未来への虹」（2005年制作）を上映した。上映後には平沢さんによるお話もあり、来館者たちは熱心に聞き入った。

また、一般向けとして、映画「風の舞」（2003年制作）、「あつい壁」（1970年制作）を上映し、多くの方にご来場いただいた。上映終了後には、宮崎信恵監督と中山節夫監督にご挨拶をいただいた。会場から監督への質問が出るなどの映画に対する関心の高さがうかがえた。



挨拶をする宮崎監督

一つのテーマに関して回復者の方々からは、当時の状況からそれぞれの個人的な経験まで、お話を聞かせていただいています。7月以降の各回について簡単に内容と感想を紹介させていただきます。

7月の「らい予防法下での外出」では、外出のために監房に入れられるなど厳しく処罰されたこと、戦後は軽快退所や労務外出で外には出られるようになっていたこと等を聞かせて頂きました。しかし

いずれにせよ「ハンセン病」ということで外出できない困難と外出してからの困難があったということとを、それぞれの方が話してくださいました。経験談から考えさせられました。

8月の「在日コリアンとハンセン病」については、制度として在日コリアンは年金がもらえないという差別があったこと。多くの在日コリアンは養豚や土方などの重労働に就いてよく働いたということ。また韓国舞踊の会を通して園内だけでなく園外との交流も行われていたことについてお話を聞かせていただきました。

9月の「居住舎の移り変わり」では、雑居生活ということで12畳半で最大8人住んでいた女性部屋への通い婚とその後作られた夫婦舎での共同生活についてお聞きしました。全てのことが筒抜けになつてしまつたり相手に気を遣つてしまう等、話をしてくださいました方にとってどのように共同生活が大変であつたかという点について

考えさせられる機会となりました。座談会では、話をしてくださいる方のこれまでの自身の経験を話してくださいることが多く、参加者には全生園で生活をするということが個々の日常生活においてどのようなものであつたのかということを考える機会となっています。

また、参加者にはハンセン病について勉強をしているという学生から近隣にお住まいの方で全生園のことを知りたいという方まで様々な興味関心の方がおり、回復者の方だけが話をするのではなく、毎回それぞれの疑問や感想も話し合うようにしています。座談会という場が、共に生きる隣人として、相対し率直に語り合う事を通して、参加者全員で全生園について・ハンセン病について（地域社会のありかたや医療の問題などを）共に考える場であり続けるようにしたいと考えています。ハンセン病

首都圏市民の会（荻野・佐藤）

来館者の声

私は針灸治療院をやっている上で年寄りの人が多いのですが、一番理解されていないのは60以上の方です。平気で差別用語を使う人が何人もいます。注意するのも大変です。戦争も苦労した話はあるが、自分たちのしたことは話さない感じです。寿命がのびた今、60才〜100才の人にもっと理解をさせるよう頑張ってください。

マッサージュ師 男 49歳 秋田